

《第十三話》

丹藏と長い刀（大川原）

むかし。

大川原の里に丹藏という侍が住んでいました。大川原は相馬の国の南の境でしたので侍だけのへんぴな村でした。その侍たちは田を耕し、畑をつくり、馬を飼っていました。しかし月に何回かは調練原で馬術をねり、講武所で武術をみがくのでした。

丹藏の家には先祖伝来の大きな甘柿があり、秋になると、たくさん柿の実が色づきました。丹藏はその柿を殿様にあげるため毎年中村の町（相馬市）にゆくのを楽しみにしていました。

大きくて甘そうな柿をたくさんとって、その中から特上のもを家来に持たせてゆくのでした。丹藏は侍にしては小柄の方でしたが、長刀が好きでした。遠くから見ると大刀をひきずって歩いているように見えました。

中村までは十三里（五十二キロ）朝早く出ても、つるべおとしの秋のことですからつくのは夕方になります。丹藏は無事柿を殿様にさし上げました。殿様からはごほうびをいただきました。丹藏たちは中村の親戚に一夜をあかし、翌朝弁当と新しいわらじをもらって家路をいそぎまし